

OPEC の思惑と世界の原油埋蔵量

(一助)国際開発センター エネルギー・環境室
研究顧問 畑中美樹

サウジアラビア主導の油価下落

原油価格の低迷が続いている。2014年6月20日にはニューヨーク商業取引所(NYMEX)の原油先物相場で1バレル107ドル強であったウェスト・テキサス・インターメディアイト(WTI)の価格は、本稿執筆時点では56ドル強とほぼ半減している。欧州や中国の経済後退により原油需要が伸び悩む一方、米国のシェールオイルの生産増もあり供給過剰となったことが最大の要因である。これに米ドル高から投機資金が原油先物市場から流出し、為替市場ほかに回ったことも一因となった。

ただし、原油価格がここまで下落する前に歯止めをかけられる機会があった。仮に、昨年11月27日に開かれたOPEC(石油輸出国機構)総会で全体生産枠3000万B/D(B/D:バレル/デイ1日当たりの原油生産量を表す単位)の引き下げが実現していれば、その後の原油価格はここまで下落はしなかったであろう。ではなぜOPECは減産せず、生産枠の継続を決めたのであろうか。答えは最大の産油国サウジアラビアが減産を望まなかったからだ。

OPEC総会では経済の悪化するベネズエラが市況立て直しに向け減産を提案し、アルジェリアやナイジェリアなど7カ国が同意した。しかし、

そこで油価を下落させ米シェールオイルの採算性に打撃を与え市場シェアを奪還する必要性を訴えたのがヌアイミ・サウジ石油鉱物資源相であった。結局、王制・首長制国家で構成する湾岸協力会議(GCC)機構にも属するクウェート、アラブ首長国連邦(UAE)、カタールが同国の主張に全面同調したことで、生産枠継続との結論に落ち着いた。

サウジの真の狙いはどこに？

市場シェアの奪還のためには、油価を急落させ米シェールオイルを生産量削減に追い込む必要がある。OPEC産油量は引き下げるべきではないとのサウジアラビアの説明は、本当に真意を表わしているのであろうか。筆者はサウジアラビアがOPEC生産枠の継続に固執した理由はそれだけではないと見る。それというのも、実はヌアイミ大臣が2013年まで、シェールオイルの生産増は消費国における将来の石油供給への不安を取り除くのでむしろ有益と反論していた事実があるからだ。しかも、2014年11月に発刊されたOPECの2014年版『世界石油見通し』でも、シェールオイルの生産が2020年ないし21年にピークを迎え以降急速に減少すると分析し、大きな脅威ではないと見ていた。

サウジアラビアは有力な輸出商品としても歳入